鎖國論

天

洋学文庫
文庫8
C 213
1

讀鎖國論

國可鎖乎則不可通其用而易其物也國不可鎖乎則不可閉其物而守其彊也一啓一閉者治國之要也古者遣唐之使留學之生禮樂文物以華吾國室町安土不學無識或以僧為使稱臣明國或以蠻為教將變國風豊臣氏起攘其巨魁一掃腥風及東都起脅從殲焉

41- 7864

舊染汙俗天地一新於是乎其鎖益固
治民不貴異物而賤用物也唯是清蘭
二國每歲進港苟易有無耳極西撿夫
尓往来斯土能記國事能知國情譯
司志筑氏能讀其書能解其語譯為
二卷更名鎖國論使人知極而有斯書
不亦偉乎吾嘗讀明人日本風土記及韓
人海東諸國記諸書嘆異域之人而能通
吾國之事情矣生斯土也食斯祿也徒
眩異物而遺用物因循苟且唯利是謀
者不亦可恥之大者乎後之君子讀斯
書則其於憂國萬分之一庶乎免乎素
餐之誚矣云爾

鎖國論譯例

一是書は西域の人エンケルベルト。ケンフルが往
年東國小淺て見聞せしことを集めて

著名ノ小日本志ノ中ニテ金骨ト云フ
名式ヲ有スルヲ以テ今特ニ摘出シテ拙キ筆
ヲモテ艶ニ飾ルモノナリ日本志ハ彼方
ノ諸ニテベンケイヒンギハンヤッパンヲ以テ
書ナリ

一書中ニ検夫尔（ケンフル）ノ自註ヲ彼方ノ
短文ナル程書ケ間ニ字ニ此ノ如ク
前後小半月ノ形ヲ為シテ其中間ニ
記セリ此方ニテ二行ニ五ツスカテ
ヲ為ス其首ニ検夫尔自注曰ノ六
字ヲ加フルモノナリ

一玉中ニ五言對句ノモノ多キモノアリ是ハ
詩文ノ類ナレトモ彼方ニ五言七言
ナンヲノ多ケレトモ只其言ノ
数多クシテ相似ルヲ以テ聊詞ノ類ヲ

一二を減じて照應をなさしむるなり惣て彼方小て詩ハ韻脚あれとも今之書よりハ詞の類なる故韻脚を見ず

表註今按するに彼方の詩も音ハ定數あり又韻をもちゐ蘭詩ハ韻を句末に押し刺句詩ハ韻字を句腰に置く

彼方の字ハ音ばかりにて義なし家等の國字のごとくなる家國の人名地名皆音を以て記せり今世書中地名人名の類を記するハ或ハ本字或ハ國字を以てし或ハ國字を以てすなわち和蘭字ハ音をもてキヨモリ。ヨシツネ。サツマ。ピセンなんとあるハ今明らかに清盛秀經薩摩肥前なれと直に本字を以て記

セり讀ム仮名ハンヲ又日本二
字の義を訓して三ツポンハ日ト基本と
いふことを記セるぬきいもり日本ハ日
ト基本といふことを記する時ハ日
本二字を重復する故國字を以て三ツ
ポンと記セるあり但し日ト基本と
原文ハゴロントスラクハンテゾンとあり
を酒をサケといふを記セるを酒と

酒といふを轟し酒ハ東文ハビ
ールといふを轟ハビールを酒
と訳を轟もれハビールの訳る對譯
なり故ままを國字を用てサケと訳
と他セり又地名ボンゴとあり也備後
とも豊後とも分るを分ハ彩あり
是ハ東文のまに國字として
記セり又右ハいふるサケも実ハサッキと他

なり是まで東文の訳なり仍て

一常の文八平假名を用ひ蘭語に

は片假名を用ひ前後を紛乱せざ

らんが為なり

一是迄元来ち鎖国論として題號を

なく又上下巻の別をなし是等八

皆之の例を設たり

一此書を讀んまゝ世界の四州

帯とするものを都て四州八皇國支那

唐を印度天竺韃靼伯尔斯亜ペルシヤ

等を西細亜アシヤ洲の中なり魯西亜今ロシヤ

の本國都兒格の都城熟尔馬泥亜國

和蘭国波尔杜瓦尔国等ハ欧羅巴州

の中なり欧羅巴八亜細亜の西北にあ

たり欧羅巴の南ハ亜弗利加洲あり

此地ハ莫羅格国モロコ莫訥木太モノモタ彼亜國を

欧羅巴より西小亞(アメ)方して亜墨利加洲有
此地、欧羅巴人の為に押領せらる
り亜墨利加ハ亦國より以て部して東
あり地形渾圓なるの故なり又五帯
ハ天の赤道に比して天の赤道を以て
南北極の下を地に南北極を赤道
より二極に至りて各〻九十度とし
て赤道を跨ぐ事南北各〻二十三度
半に亦号と共る燈世帯とよび二極を跨
ぐ事各〻二十三度半に亦号を行る事
を帯といひ寒暖の中なるを南北
何れも正帯とす一燈二寒二正共に
立帯なり亦号を北緯（赤道より北に属す）大陸
蓋広の海辺にて三十度なる津經
ゆく〻四十度なりこれ北の西帯中
なる地なり　作噩之歳鴈来月既生魄

鎖國論上

極西　検夫尓著

今の日本人々全國を鎖して國民を
して國中國外に限りて敢て異域の
人と通商せざるべしむる事い實に
所益あるやうれりや否の論
彼等は地球いかくも廣大なる世界
なるものを今日に於て
夫よ別をなし今をなるものを好
まず彼長を不通なるを議去多くは
好まざるなり
無通商しせん同好通交の道いかの
有るあるを所なるを今も一是を問ふ
て我好まず其衆の大なるの人を勢を
小等しせん化造あの生ずの相熟の
同類聚合通交をすることを欲せざるは
さきに此義を背く議論を立んとするは

実に造物者と義視すべきのみ豈世
唯一の日輪を見唯一の地面を踏て又も
小因一の氣に呼吸せり天地の我為に
設る所の節度造物の我に与へる所
所の法則一切通交偕生の道に
関係せざるものなし人生きて
戯藝するも若しむやと言人として何の戯藝の出
らく異域に往来せざるべからざるなり豈かの天心の妙用自生
を合体せしめて我霊体に生ず主客
共に所の神端を仮て形躰一和せざ
る所あらんやせん言ハ神形全く相別るゝ
ひとり逸楽を ふたゝび形躰を離て神魂
ひとり逸楽をもとめるも今其形躰をもて常に一
國の中に因圍せられて神魂
をもて何を殊邦異域の奇観娯楽に
なりもとめるを思ふて可ならんやと
かの無星も世辺の天際に立てこれ

為る大小競ふの如し（言ふ徳量まことに用拙して其行を事
ふめて行て行ふる一所をもて
寄らんと勿り）　学者多く　信
すゝく諸星の群るゝくして勝たる者
不毛の境なるを以て独り是まこと名く
一世界なりて稚しの有情なる衆生の
中に天を信仰するの道をも知らん
ものありて住むもの多し独り地球
地球世界の未生以前より是等の衆

生に既る宇宙小充満するものなりし
ヨブ（古人の名なれど又其書の名）の曰ハく見てこれも又世理を
いつかるとあり人もまた何ものの人を巷
学陋習の小器を脱出して敢て英雄
偉言上の見を立んと思て直に造物の
意思如意の垂窮るを以て信じて以く
決定して惜むあるあり事あるれ日生
群の天上あるは警ハ法大域の地上小

あるが如し然も天際深極の大氣甚だ
遠くして中間に倚なれば其世界彼此
生ず通行すべき事能はざるに既に此の如く
不通の世界を以て鏡き、其他世界
に住めらん衆生も彼此異種異
性殊状殊形なるべし是皆実空しからず
かるの道理なり是偏に信を言ふ
堪へざるの事なり況獨り吉実の道理に
支適ひて世を反覆して彼に
達して見るべき今かの猶当至智の造
物者の同性同根なるべきを以て造りなせる
衆生にして若くば彼球若くは此球の
世界を共にして同く住めるべき歟
一城の内に同居せる民のごとく宜しく
お親睦して失べきなるべし乃至その
道に反り其を破んものあらば宜

羅科ゆんてゐ其種又自ら明白之叔又
別て我地球をいとて造物者是を設
あん民の住ふらて智恵と意想と地球
て布ちくことをしに造営して其人民を
して悉く皆あ通して一統ちるとゆ
む國土の異よ他て其産もる所
往しの草木あり種しの畜獣あり種し
の金石有天下富饒樂の地とゆ

悉くゆ万殊其前よ備て異呈ゆ
ゆふちるとゆ地あゆ

此有饒米稼彼有美蒲印度出
象牙沙巴産名香沙巴地名

それ人倫ゆ扶助すゆ而の功用のゆ
これを通交因好の要枢なるゆ号
独ゆ今の日本人ら目前よこ天理を破
廃し顕露ゆかの天心を涇侮ゆ者ゆ

天の期とする所の同好の法則人間一日も欠
てあるべからざるものを強ゆるべきいわれ
なし正理小道にてもいかなる邪なる中にも
とせん既に其國中を禁國にして異邦
の人を通商通交せざるを乃至
入来せんと願ふものあるいなれば拒
みて遠ける人境内に入る者恰も獄囚
のごとく暴風法員の為に異國の浦に
漂着せんものをとらへて異邦を見
しらしに笑ふべき生涯なるを国国に
とくし自らなすべき捕獲なるこの
国を去りて本国を去りて人
の住まい若くい國を不日にして出ず
人も又い海外の所にを見んと欲して出
らんも一切に是を禁制に處し異國の
人不幸にして風暴破船の災にあうて

かの浦より深海するものあるいは捕ひて獄に投ずるの類のごとき豈かの造物の制度上天の法則の天下小樹立せるものを破壊するに非ずして何ぞや

右は獄國甚其理るるきに似ること事を以て諸星を者し一世界なりとする多い元来厄日多國人の始て發明せし一所なり世天学家多くい此流より論じ推すは先づ太陽と恒星とを一種とし同く動なり地球を童星を位置して共に太陽の外を繞るものとして五星の類皆各〻一世界なるものとするの説妄曲の多い天学書より見て予の説ものれて今い異しつ又太の中間小人て古四句の文いえ文羅

句語を為て紀せり前の二句は古
の詩人ヒルキクエスの語を本つけりと
見てり今スラールト人名の羅甸書に
よりて錄す大意を敷しるつの
ぬくもれども原文作意拙筆の
ゆゑ動もせば第の味を錄す
而るあるに沙巴ハ福亜臘皮亜國の
中にあり

右の陸天下を一統同好しるさんと欲する
の論ハ彼方殆て諸家雷通の言きり
撿夫尓次の陸ゆ言んあるを先ッ度くこれ
を挙へり次の陸乃撿夫尓の獨斷乃
論なり自相自答の如
今我是議論ゆ遊んと欲する尓かの日
本人の為今の國法ようして曉益する尓
あるこの故に必ず独せざるの能ざるの

実理に於て既に博学なる智士の異見
あるものを学ぶひつまづく、徒象者
自の無説非彷彿数多あるべからめれたは
皆そなへの高る任すべいても新くに
暫く徒説を以て絶て我を倫すをを
止て誠に我放言せんを伴してよ素
國より理義の可なる示唆つき示数多あ
ふりて心を傾て信すらく今我球北乃

面に生て住むるに独く異習異趣
の徒俗を以てするの造化の聖智妙用
に於て逆に示あるなりたとて一面の
地ありて性に一種の民を容つきのそなる
して種に許多の俗を生る宜しき
時に我号必ず域内に於て河あり海あり
連山の周繞せるありて分地の界となる
と尺寸吾所去別なる奇特かの造物に

と云て各俗をもて各方に居住して自
守自保するものあるを見る且
天既より羅百尓言依奈孔地方の時より
至てかの住和いまゝ同朝一群の人民と
して其密交同好を結て仕来離散
して各堂をもて各地を住居するに
到りむるものの出豈千好所期の結
むるものあるの確乎たる明験を示せるに
あらずや（ばらばらより注也）其後より人民の根性
一化しまるるに彼当方に於て漸く
一群をなして一箇の王國をなし或同好合一
の國をなすに及て自然に同盟するものの
お親て隣国の吳俗をなすものを悪て
又いそ栄を妬めり（王国八主の忌之同好合一八後代各別るれども合従して一箇の名）
と云て事ごとに争ふ者の是也今かの人主の
所有の地はあるに
其俗を嗜むものの天位の封界を越て然

元亦領を廣大ならんとせれ、其地に於
ける方の强弱を考へ、おけ他方の發動を待
るに違あるべきの理あり、内外兵寇深く
起りて却て本國疲弊の地面を失ふる無
きを又同好合一の國の法大なるものいと長
上なる事なり、諸侯偏倚合の力を以てするに
あらざれば、麾下の諸侯政法各別にして事
互に猜忌の心を懷き長を以て短に
なるものは沒落するに即て速なり
造化を以て無地なる恵むに一切有用の具を
以て住民を境域の内に滿足
して爲すも化人固有の地を犯す心を生
するの道理有へからず此のごとく史冊に
も強く痛きに値遇するは新奇
云ふべきものなり元滿なるものは強い
お敵害しお撓挠し全國を惱して荒亦

ことなく無人の境とするまでも言はなるの怖しき大変怖しき兵乱あり悉く刻不仁のため侵奪の業のぬきん人間一切安智をもつくしてをあるまでさらに又心安く其地を営み勤めく凶荒の化を聞き好て諸学諸芸を盛み進て善道を修し悦て端正を事とし情欲淡わかして私なるを金らに苦を常に悪を罷する

廉直をいしるを肩ふる謹慎をいしる家族を所ふる精富をいしる自ら無他をなく其るを福をなる諸族の国家の治綱を守護する只り安寧宜も慶賀すべしは日本人の一流まて地ありの其国擯の内より太平の澤を受て英国の人と通商通交をなるを患とせしめ何ぞ地勢有福なる

是等のものくさも博物学者の
もと我業の異國を通商通交す事
を始めとし人生切用のものを取束
らんとするもとかの切用のものとして好み
らしめ使ものらしめ使ものもむることを
務めとものを来りて貴ぶて尚ふして
為ていもと花奏の風を止めんの為なる
い議ろつきまい有る民族花奏を止むる為なると

為して貴ぶて刑法に拠て國政理治せんの為なり
我國治法支那法を参考して
而あるの形をとりて教法を我心意をもして
安全堅固和樂するの為なり我国の佛法印
なる事れて学術を我法根をして伝利る
の数
らしめんの為なり器械を達用のあ
もとい美好の為なり医業に我性健を
保ち又を性健を復せしめんの為之業
皆我業の異國人を求を不ものなり

彼れ今富て一箇の國あり造化これ
ゆゑに寛容の德をもつて一切生命
を救ひ保つの誘用を具へ施して彼れ
其人の勤労よりて國勢強大なり
し世界に著顯なるに至りてきい若し
元地球の面きに他て國外と隙
衆の内に侍ることあり其
し且又國人の勇力勇氣外に入寇乃
至其國の防護
もなふ足りぬくたるべき慎てあるべ
きの限り異国の産物器械を用ひ
して是をよりて是をかまへ永長怪
怨詐奏の風俗ひ詐偽戦争計謀
の害を免れんあそ唯し彼の常術を
のみ用ひ大なる其國乃利
益をなす事必定なり所謂公示

あるを尋ねに今より遠からず世小知るべき
る日本まで有るべき歟今左の小紀を
其変を述て特に日本と他國との差
別を明らかにせんと欲す羅百尔巴毗
蠻國羅百尔墨西哥墨
あり今破壊して山のみ見るのみ
太古アクとり人の時天下大洪水あり
て万民悉く没溺して唯ノアクの一
黨のみその災を免て巴毗寧の辺
國をなして衍ることふ蕃殖しその其
後大洪水より百年ありて奇
觀のわざ有るべんを墨西哥に築きその
天其長役を惜て民をして使黨
を別て分て自治の言使を建ふし
和合て一統となるの能はざるむを止
力役を借て術を教へて黨を引く

四方より分散するいとり古洪水の年暦
を考ふるいとまなく當覺之時洪水横流
即ち天ノアク尊を暦業金書より上古
大師諸尼とある是なるいとアルケといひ
し大なる樟のごとくなるものを作り方
舟を乗りて洪水を免れたりといり
太のノアクの子セムを亜細亜ジヤの祖となりヤヘト
を欧羅巴の祖となりカムを亜夫利加の

祖となり亜墨利加もまたカムの後なり
んといふ惣して欧羅巴をいふ今の海西
界諸尼の後なりと思へり巴毗寧國
今ハシヨーロシヤ國といふ伯尓祭亜乃
傍よりあり又其高原アララツトといふ
大高山なり山上天氣常に晴和なり
諸尼の舟なりしアルケ今猶存ずる海西
にありといふ惣して古の一殷に銘を基を

理あるを以て通商のみ今日我
長崎に於て唐和蘭陀の交易あ
るも皇國にいたりても殆て和蘭通商の
きふいあるも此号に欧羅巴の眼
より見れば通商といふも是にて
但し唐和蘭陀の事篇末に詳せり
ヤツパン其人は日本(ニツポン)といふ日の基なるいへん
うめ　即彼欧羅巴に於て是を呼のみを
祀り　諸家の字初より名誉の遊行者
即溺祭亜(ヨシヤ)のマルキユスポーロ(マルキユスポーロ一人にが孛漢を注す)実に
以て此國是なり
象嵩の趣を称して日本といふ許多
の湾あり峡あり又遠く北中より東
まで海ありて彼此の北を隔て別てり
しむ其形や左國大玻里(ブリタ)太泥亜(ニヤ)と喜百
利尼亜(リニヤ)とを似たり大玻里太泥亜は暗尼里(イキリス)亜国と
思可奇亜(スコシヤ)とを兼ねたり此二國は

一島なり壹百利泥亜國に別屬すして　東方隔絶の
又大玻里太泥亜より屬なり
境よりあり造化まことに是より恵むより勝れて
暴猛危險の海をへだてて殆ど絶て至らん
ことに攻て克服すべきの地なる事を
思ひもむ是より南方諸國より漂來
す海船周歳の内多くこれを暴浪逆
風を犯すの時ふして我徒の船行り
用へきの日い僅よ少許りの月なるのを

巖石多き海岸より梅もそ小曲隈淺水
充滿せるの海をへて大船を寄せる
る但よ一箇の佳港ありて稍著大の
船をも容るに宜しられを長崎港也
又船もそを拠て寄せにして拠て
小近廻せり被所の舵師共海の淺水
山礁沙堆うんてくく暗化しうんの
小ありてもまく通行の危難なる示たり

所より外交するを港あるて成ものに
船舶これあるべしと人好生の心を推
し我等に告るものもあるべし元来我
土の大洋を海の災害危難別て臺灣
琉球の辺より来て甚しきの類を逐一挙
ふ遣あるに古時波尔杜瓦尔人（ポルトガル）
なりし頃日本人（ヒホンヒト）
南蛮人（ナンバンヒト）
彼此通交せし海路
彼此補虧せしの時いひるるの

三艘の船を出して其中の一艘忽なく
那蒙ヒを以て物も有幸の蒼とせ
とりされし海路危難常より伴
ひて離れ来事知ぬ
欧羅巴洲匈牙利（ハンガリ）国のマルキユスポリ
ユスといひ著後宇多院建治元
年十八ヶ年して木國を出て韃靼國
行てキユブライといふ王に事（其五の

支那國を侮ること時を値て支那
を行て前後十七年の月日を経て
用られて其後印度を経て再び
海を渡りて「ヨーロッパ」に入の世
祖の名忽必烈と史に見る是なり
（このマルキユスポーロ氏ユスの話なり）
し欧羅巴人に見て皇國を知
るもとい「ヨーロッパ」シッパンキリ「きりは」を他

譚の言之

其他の衆庶なる事言ふも及さる亦
なり然く名大の域小して斯る英大の人
数を容るる拾理邦なりと想ふ人もあり
なん其徒大路のかき、村京城郭連續
して始て一列なるかく終るかの一郷と出
さ、即又この一人よりして数里を経過
るも唯る一乗の御市あるかくにして

実は各村の合成せるものなる事
上古別村なりしを以て今合すれども
猶ほ分りて其名を異にするのみ
城邑多し其著大なるは摩天莊嚴なる
ひ各廉なるも天下諸城の完大なるも
の別に小あり其一をキヨーと又はミヤコと
いう皆稱なり都城まさに首都也
いつつめーゲースラレイケンエルフケイツル天子をいう其美は淫
淫寸但一厳字なり
譯者は意なり
一辰各我
半辰黄
斗り横二辰余斗り城下の殊甚
秩整にして法御お稱ら不其角宮方
正也黄廿七の図を見よ検夫小全書中より件
図其中
より有
又江戸といつるあり実に全國の
首都なりウエーレルトレイキケイヅルを將軍家
是又注を
注を
の御座なり我教て是を天下
小知らしむ隠もなき大城の影なり

といえん定三十の國を定め些事改改
者をつかわし知らしめあり城下の品川
より駕して疾走する徐行して
大道を通過して行く其道実に微
く屈曲せりといひつべし然るに
海を一方に見る所を仏乃
ケイステレイケンは仏家なりて出世して以
乃如し エルは世間の義なりケイツル

は帝号なりウエーレルトレイキは
仏家小乘世尊といつるかし出世
帝世間の義を漢文にて云ふ禮
樂帝刑政帝なりいとんかし
検夫尓蘇尓祭亜國の使者より
伴ひて魯祭亜國を経て伯尓
斉亜國より行き遊て咬嚕吧小
浦りて夫より元禄二年癩医

となりて羅(シヤム)羅國を經て我國
に渡來し其年來朝し
元來い医師にて天下に大城廣袤の
江戸よりも大なるゆゑ、亜米利加
都見格の地厄(エジプト)日多國該隣城北
亜墨利加(アメリカ)の墨是哥(メキシコウ)城なんとあ
り該隣城大サ郊郭より中央ま
て一日半路是城土重の門あり

中なる路ひろく道きり市にち
生ずる獅子ゆきゆひ龍龍ゆんを
賣ゆ示あり(ニキール)ヘブルと云ふ
人の祀ゆ見てゆり是を夫古貧一
の大城にて千萬所不國の甘巴亜(カンバヤ)
城基廣大なるゆて天竺の該隣
と号て以て墨是哥(メキシコウ)ハ周圍拂
郎斯國の道法ゆて三十里と

コウランツトルクとゆ出る見てゝ我
二十六里余に亙れり是城往古
洲の墨是哥國王の都城なりを
改羅巴尼の伊斯巴泥亞國より
奪ひとりて今の國名を新伊斯
巴泥亞といひ其邦支那の北京
城中城下を共りて周圍都逸
國道法まて二十里といひ我三十里

八合ゆり人數六百万余あり乎
禁軍二十一万ありといひ是等の
地江戸より大なりものなる
熱尔馬泥亞國王都ウエーヲン城
中城下より通して人數二千万といひ
拓地北京より十分の一なり魯細亞
國都莫斯戈城周圍七里
言されい和業
ものさほなり
といひ我九里半なり

ストロイスといふ人の記に八九辰路て
いふ九辰は我六里弱なり又王室
所屬の邦城中城下に九万五千戸
あり往時は今の一倍半なりし
うち一時カサンドロキクミの讒人謀
反して大に乱入せしより以来に
大分古のおくるいふ但ストロイスの記
小生は寛文の比のなるべし九里よ

尚後に聞く寛文の頃
彼の魯細亜國大に異記しれ
今はもと初のもとく大なりしも
知るべし伯尔斎亜王都イスシン
拂郎察亦の道法にて周圍十二
里といふストロイスは十五辰路といい
拂郎察の十二里は我十里四
合して十六辰路に当る都尔

格國王都公斯璫丁百兒城周圍
意太里亜國の道法凡十五里國
周て市城とを除き十二里といり
て十二里ハ我四里三合斗りなり是
当代外欧羅巴の大城ハ意太里亜國
都羅馬(ロマ)拂郎(フラン)斯國王都把理(パレイ)斯(ス)
諳厄里亜國意太里亜國の道法
凡十三四里といて我四里七合

余まくい五里三合弱なる者を把理(パレイ)
斯(ス)もロンデンも大サ大概羅馬城の類
なり右里数ハ何も皆もコウランツトリク
ヒフラ子ルと
よく人巷ヤリ
決城の中宮大なるハ伯尓(ペルシヤ)奇亜國
のイスパンなり独も其周圍我十里
四合より南の方ハ海を象形の筆を
きい全經三里三合斗りなり江戸の

全經八四里といひつたへられ、右の數城伝
きも江戸の大坂に及ざる事知るべし
是をもつて観ずるに右の外よりも要害
利加の馬邏可城弗沙城なんど
あれども江戸より大なるものいまだ
聞きる事なし然るに拾遺家國は
京都江戸をもつて天下の完大城の
列にあげむるもえうの的當の

備なり但し古より我邦の道
法を六尺半を一間とし六十間を
一町とし三十六町を一里とするな
のをいふ

日本人は一箇の氣象あり我邦を名付て
膽氣なりとやいはん英勇なりとやいはん
英勇なりとやいはん雄敵の為に打敗ら
き折負てるけ時きさい怨をはらして報ふるな

能さらに世を至りて精神恭然として
自ら強手を加うるものを難しとせざるに
其生命を經綸するの斯のごとく
校著の言は田作兵の羅甸語を以て
此編を記せるを案ずるに絶筆と自
己の腸を加ふるを見てこれ是れ其人
通例なのごとく腸を切り割きて
自殺するをいう（検死官の死後まを依
箱を次序をなして）

（金助なるものを事う辞
校著しいう）

其内九の事跡に於て実に驚くべき
ものあり完璧なりきれい昔時七人を
勇氣遂一生をんるを希ひしの明白
其史記の載る所よりして義經清盛
楠阿弥仲麿（野馬堂自敎の説なるべし）なるいづれの人
及び其餘名譽ある人の大氏切あり
佐を学んるものい何遂も日本自賛なるの

かの古代羅馬人ハミユツナイスラホラ物語
ホラツツナイユクリテス 天武時の勇者之 より聞きたるなる
るべきを以信知るべし 古代羅馬の人改葬
を羅馬の代てゆ其間者の民物のみ 巴の内外を兼併せり是
今迄て傳稱せらいつり 家より後来我
ゝ説説せり 亦の尚下は一説にすぎ
きいかの薩摩例の產なる七人の若士異
國より於て別て和蘭人の前より於て奉有の
御をなせりまて飛あり 亦の其事左の云

るゝ如し 千六百廿年 寛永七年 のゝなり 亦ゝ
其比を以日本もいまゝ四方の通路開き
國人何もの地もても隨意る行て通商
しるる形るゝ 一箇の日本小船交易
の為る臺湾より 後より臺湾
の代支那人より 支那
は不能 其比を以 和蘭人の地すて
尚時 和蘭產なりゝ ピ——トルセイツ名臺湾の

刺史たりしころ遠眺ありてのち、いかん
かの小船まで海の来るを日ごとに待く
励しくこれを招ひける日ごとに人、謂へらくかの
ゥ男、庄のこいふまゝ呉ゝ孫とも呉ゝ我
君の恥辱まことあるべきとて其
主君を討ひて大に驚き怖て斯是
しき恥辱を弥まいれ、ナンパニイ 検史尓自信曰南方の民をいう蛾
称なり紀呉玉人をいう皆ひて別て和蘭人をいう僻
者曰ナンバニイは南蛮人なり我の石偶南蛮人ハ伊斯

巴泥亜人波尓牡尾尓人を以て
和蘭人をハ紅毛人とこれをいふ に受て拒もまゝ
敵ふべきやうなりとの指ゝるかの主君
大に憤怒しゝるあに其衛士号曰我君よ
君を見し我等よ君の雙を敵ふるを
怖しゝるゝ、我等永く君に侍衛する
ゝ能ゝ我等新くに奇ゝ君の血を以
些汚穢を洗濯せん 彼凶賊ゝ首をうる来
らんゝ又ハ生ゝ君ゝ前ゝ引て君をれ

隨意に適當の罰を加へ、我等の中より七
人あるを呼び返し海路の危険なる城
郭の堅固なる侍衆の多なる彼方の
防禦をなすも如何にして我憐憫の筑
利なるを憐み彼等は南蛮人なる我等は
ニホンジン（検夫尓自注曰日本人といふなり又後生を譯者曰検夫尓何をかそ
なるを知らざるなり）なり神祭なるを以て
頻りに請ひ求めて強く許容を乞て
帝り是実に大膽の挙ことい一言も謹賞を
用ひず又おろそかして勇氣を撥変
とを以て是を能しかり海路所ふ
て悉く墨漆より刺史より偽し
即一奇なる刀を抜て彼を擒所て自身
なる船に伴ひ引返侍士家族員衆
あまたとも彼の力を撥て威を示し僅なる
く敵対するものあるに時に刺殺

人とす。皆の不敵なるを恐れて一人を
殺して彼等を退散せしめ刺史を助んと働き
障る者はなかりしなり

和蘭人等日本人をヤポニーセンと
いひ又ヤッパンドルスとも云ひ臺灣
の佐い演田兄弟なるなり主君と
いひは未次郎を以て代官を検
夫れの言お遠せる所も数多ありき

てはなすまじ違あり孫と大意は
能安思ひ和蘭人まで我國の俗
とも為すべしと記しれ左の
のお遠いあり思ひ人人譯者
をなぜ名ひ給ひ
豊臣宗厚の孫なる為て同僚お秩く
未孫なるもまて是をもりて当て為
不法怨恨の意趣をい子孫受引て亦

他をすて悪党の一を滅し敵し殲す
小邪され、多くい止す化生民彩の常
は風俗なるもの勇敢変新奮よ所行
廣て民を以て日本の國權を奪しき
内外よりかを事をい平家源氏あ蓋
別て事ひらるを以て日本人の怨を合
こ雄を復するの心深く永きを知る
き一倒して其位を失にもく家

南も武戦よ勝ち源氏の平家の
名族を全く根を拔よ滅されい竟よ
滿ちたりしをもて程よ辛き一死を
逃れ生るは僅よ数人のみして陽遊
の地よ求てポンゴ（備後と豊後と）の中なる行
もり為あ高山に走り居りしの
子孫迄き沈よ至りて露顕しるるの
り同じよ住居りかのまもて大家の

恢ゐる所以の吳明の心を奮ひ
て人を勸め奮て却て猛の勢を迎へり
しと也

右の條肥後の五家武士なる俗
日本の地自然に異國和して今に至るまで
外寇の恐を免きるの極て鮮し希なる
犯し難きしかといへども其利あ
りしるの所以そは勇猛無欲の俗なる

て代の合金を鑄て千年より前成
極武の所字を南て大韃靼の無禮なり
大軍を擧て我が日本の浦を侵掠
検夫れ自註曰韃靼と稱蔵といふハ國より西の廣
大なるをいふ元の時厄勒祭亜文よ
といふ也をいふ或ハ一國の川のほとりなる
いふ也思ふに得たり澤者曰羅馬の代の以前を
厄勒祭亜の代とし厄勒祭亜語ハ其北の雅語なり
羅馬以東の羅甸語のごとき是ハ古言を傳ふるの文
く厄勒祭亜文を引り其文稍蘭文に類ふれども國に
り弟の輩の詳に讀所なあり
攻擊甚火急なり て歌軍をやくも陸地を

取て基とし給ふ程なる日本人にそむき退治
すると甚難かりしかは其故に彼等毎々
挑戰して屢し敗軍し其勢是により
て大に衰滅せしかとも韃靼より更に進て
新軍を徴り倭へ襲ふ勢を助なる程なる強
き十年の拳を堪て終に日本の地に居
て動さすに終に七百九十九年（延暦十八年）
國の守護神の威力冥助と日本軍に現

氣勢力と一奇に起張して強き彼等を
拔き滅しかり此伝とする日本に史に記
して曰クワンノン（検夫尔自註曰クワンノンとも云ふ日本
ある大神の一にして女子の像之譯
者曰觀音
といふり）暴風雨の夜に出て其許手に
検夫尔自注に曰
是を通力を驚
と以て敵の水軍を沈溺せし
む其翌日に神の選て本國を救しむ城
日本大將田村麿進て攻るに至りて敵軍之
ら降章し力を盡し居るを折るを前

に、奉事の望屈きなく後より引退して武
勇なく田村麿全き捷を得る程の人心
生て國を傾りて勢の大敗軍に石事なる
事情を其人に代て言はしめるに所の
交二回八後宇多天皇日本に帝たり時千二
百六十一年（弘安四年）再び勢のそなるを聞き
韓朝の君世祖此時既に支那を支配し其将
モーコ蒙古のなる少て後世なる
其家将軍なるなんの強を用て日本

國を滅して其既に得る所の大邦を兼併
せんと欲を是より出て即ち大将夫弘
早稲軍士二十四万を授て出す（検史に自註曰支那の記者は唯十万なりと云へり）
弘安に日本の浦に来たり
風暴烈きに乗じて是迄大敵の軍船
なりしに和中なり軍士悉く折碎して失
以是より前日本いまだ嘗て敵に破られ
られたることなく又是より後とても

日本人の戦ひ勝て敵を殺すこと豊臣氏
二度の攻撃に至る迄の程のことはあるべし
凡日本人其大概をいへば戦場に至て進害
暑教謀暑彫琢軍法に至て次序
あるべかく将帥の命を聴て従進
して其宜を失はざる我既に
信受し人も亦あんと欲する而ふしく
後世に到て自拙なる天下に明白なる而

なりと雖も日本人を畏怖すること
国家太平を安るの久しき静謐を保つ
甚しきの時の如くなるも他の諸国の多
く豊臣氏より懶惰怠傍懈弛逸
楽を生して衆人懶惰して怠惰
風俗となるべきの恐れあるべ
に其部其人常小言名なる古人の大望
勉のと戦服膺して戦場小勇むの烈

き志切ひ名誉を好むの強る心を養育
するに甚親切なり甚るを育るに剛
と勇とを以て貴一なる重き教訓として力
を尽して幼心に銘刻するを以て心とせり
見て知りされば強弱の見聞位なるとき
は父母毎に軍曲（義経の歌曲なり）を歌て是を止
む左学の童児書讀を学ぶに他
の字を雖て勝まてる勇士又は其豪傑

なりとし英勇なりとするに自教をもて
せし業の遺方（義経倉庫の歌）なりひ其事跡の
みを問り是術を以て童子幼稚の時より
して剛心勇氣及ひ機智の心に養ん
と要するなり長者集会するとき
多く古人武切のことを談するを以て愛てり
史冊に記せる所を伝りて委曲に徴なる
に至り彼も又自ら是の為に感慨する

堪へ難き豈唯に彼のみならん今聞く今春の
嘗野に酔ふて酒を飲てすらも甚
だしきにより國の格式なく山の頂に火
と燃たるを見い國家と警戒軽の
危急に及ぶや或は帝より諸侯に命
して即ち部下の士卒を率ひて
い集てゐきたるべし斯のごとき火を見
き人群集して記録せんことを

欲し者し武器を携へなのの陣所を糾
らむと欲するの急なるに堪へ難き事
迫ひ迫て聴命の暇なんことを欲せざ
るのみならず成名を好むの急なる戦闘に
勇むに烈しきみつから好て危殆を冒す
地に当らんと欲して寧ろ此の急烈
の心よりして時に或は其身の不利を成
して大に後悔せざるを能はざ

彩て其命を受んと欲望あり日本人き
兵器に冝しきに至りては遠く我に小
弓あり手鉄あり手と手とを交戰
ゆるに鉄と刀とを兼ね別て其刀は鋭
利なるを一刀小して人骸を斬るに
小憚なり此俗を以て是を異
國人に賣りもとめ國外に船を以て密禁
すること既に久しき賣者は磔刑たり然小
ども密に供人は死刑なり
古は我國の武備をいて検夫れ以
来既に百年餘こなりぬ然ども我國
に風俗其比と今と同異如何の
ありや宮殿墨の殖産雜俗
小も豊器に体あり
日本人なく勤勉し又なく銀雜なる者
を解ずと雖て是を捨て棄き者は法

竹法根龜蛇螺蚌なりひ海竹の類を
以て生を養ひ裸頭跣足にして歩行
を水を以て常の食とし襤褸衣を著
もるとなし頭を置く所なる長拓の
平面に寝て長拓の代る木片小断又床
箕片中の微く窪まる所頭を置り
又紙紬を寝るとなりて有ゆる雜類
を悉く極く其身を陶くし衣服を紙
稗小家屋を精密なる
錢者なれども水のみを飲ることも
あるに又襤褸衣を著さる者は
以て称し是等も彼方に比較し
て云ふものなんん
日本人をい法儒なる支那人の後にして
んい実なるの理小者さることを思し我自

僧もしくは以前あるいは遊行者あるいは
なるもの、伝を国教七にして努て是
國俗の根源を尋ねんと欲せん人ホ
ロ〻ふ直ち我国俗ホに協服してよ
是俗は却てこれ韃靼の性質より生て
文華と礼儀とにおりて大なる都雅なる
面目あるものなり其氣象は韃靼人の威
烈極悍と支那人の恬淡温和と相合せる
所あり

検夫ホ別は其編ありて我國人の
根源を稽ふる穿鑿すれども分
明ならざるは韃靼の種か
らむといへり検夫ホさすが我人なれ
我国の実は神明の後裔なる事疑
なきも能はざるも咎むべきホなり
後来ホの拳示の件々の大奇特に有か

くも若し其境内に於て一切和平安穏に
して逸を満足するに厭系の者のみは
日本人の其力を恃して其勇を恃して國
を守りて外寇を防ぐを欲して又た著し
く異俗を通好せんを欲するも亦た
皆住古の計策なるは鎖國より
以来造化の良師なれに其術を教へるも
又覚知し大に其土地不生のものを生して是
を以て惜しむべしとて異國人の生計
貨を運搬するを無用なるを以て元是
の福境なるを知らんも其一の地方
勝れて中正也其利なるの寡かるに西
方のみの熱日に晒されて又北國極寒
の凝凍もありえざりいつまでなるを
以て土の肥沃にして喜(ヨシ)べく楽しむべき
此緯三十度と四十度との間にあるを

くゝ[illegible]人或ハ実ニ非難[illegible]ハ[illegible]
いなん日本ハ険阻多石の地にして[illegible]
山の周環多く[illegible]拔群の用心[illegible]方
[illegible]せ[illegible]ハ[illegible]れ険阻の不[illegible]
[illegible]て其実に[illegible]も造化
よりき是國に施すに勝まて寛[illegible]の徒
を以て[illegible]是土地の雖[illegible]耕種の雖
[illegible]即チ土人のよく労し能勤[illegible]

大に[illegible]の地方[illegible]
微小の[illegible]
[illegible]是小耕種するに豊に出産して
[illegible]農夫の[illegible]高小[illegible]
の辛苦用心[illegible]其勤苦を数[illegible]
[illegible]
の地[illegible]耕種を[illegible]
[illegible]其民殷多

而して且又懶惰を惡むこと斯の如
其上ちかく狹まる國界の内に於て
若くは海若くは陸の所産の許多なる
物を以て其用を達して唯生命を
保つの為めに汲々たる俗利敗殘の徒
屬ちかむの術を知らず食物の
上を見ては先づ自己の和して供
物殆ど供給しいまの如き他俗小

生を惡むの如き彼は生て小大
共膳に分つる者なり其林中山中澤
中荒中決根決草を採して俗奏の
為めに用ゆる又は食物を師匠して
海陸の有情非情の決和蛇蟹螺蚌
鰐鯽の如き決海草の類を取て皆よ
く調進すること魚中或は毒の多
きも恰も殺生を戒防もとより制して毒の
をさるが如

是造化に倍する處すること空く寛闊を
以てすれば非して加きを強をして勵
まること宜しく頭腦をして穎敏発明なる
に宜しむるものなり世代険磽わりて
耕稼すること鄙きに加れり勤の道を倦すべ
き保宜を虧する所以なり其勤勵を代
て懶惰癡愚遂に隨て衰微するの
嬉笑中なる為の土人自然生の草木

を剪て其生命を保て些よりて大小懶惰
不勤を為すこと奮歎に異なら
ざるかなるを高らかに示
まる人の非俗すべき土人其境内を
囲る獄囚の如くして隣國と通商交
すること禁じ又其全地分裂して殆と
無形の嶋嶼より是を國の形も不事
なるかの如く独いそめと呈まる却て造

化寛良の徒を知るべきの殊に便捷なり
是許多種類の為邦内の其全國に於て解言
一、種類の方域の金世界に於て土地
に隨ひ所も一に限ひて種類肝要なり
を為産して人生の用に其彼此有
列彼此各国の産物殖し全國に供せ
小量なるものは奥州佐渡シリカ琴の
薩摩に金砂キタマイ肥前ベンガラ薩後に

銀あり（シリカ全上アチンガ解）紀の國に銅あり
豊後に弘あり伯耆に鉄あり筑前石炭
を供し才ノ解木炭を供せ硫黄の峠の火
山験し硫黄を出す其他所々地を産し
丹波に肥前に一種の白亜ありて有名
磁器を製し土作オンラ小豆を安藝より
多く藍を（ナカタ長州のもの）牛を産し奥州
薩摩馬を産し加賀米穀豊後の銃

前に栗多〻芳狹る柿（柿蘭ともいへり）
雲州のかくるれども今柿と
譯すべきなるべイケ実に優
れり　かゝる其餘の菓
多〻隱岐の海濱螺蛸を生ずること鞠
きて他に越たり（西山の伯耆の北名なりや）海牛
かゝる海底の産物多〻元全國の海
濱捨てし魚類を生ずること殊多かるべく
而して其号の外有り諸穀諸蔬
は數の勝しく佐州に生ずるもの及び他

許多の貨物の器械衣服とするものハ毎
年多く遣あるべき玉珠ハ大村の海濱小
あり絹紬は琉球の浦薩摩州および紀
州にあり水晶貴石の類は津輕にあり
又其國中に山谷多くして高低諸地多
く寒國佐方に生ずる所の種子其苗を
生ずるあり醫草を求んと為る外にも
出もて珍もちひ而又百工の器物とい

を師とするに有用なるに其材物小
なりとて又力勤めざるべからず豈能業を
外國より呼来りて待たるのみん
神妙精巧他の佛像に超絶せり殊に
金銀鍮鍮かりひ銅に於て勝れり又
生鉄錬鉄何れも用巧鍛煉の術を得
たるべし其武具の奇麗好良なるもて
知るべし諸像佛板を彫刻するかりひ赤
銅を金色ふすべ巧妙敏速なるもて東方
佛國の及ぶる所に非ず赤銅に似たる金
と其色黒きを迫くしてそもそもの為り銅
小黄金ずみを交て術あるて製作せり
を以て作る器物其初メ工師の手より
出るる時のごとき金の黄金のごとく其色
い美黄金に者るに不実に庶幾しまた
術を儀て精妙なり得べき支那人

とゝも擬すべき紙もて製の大臣
るの生もられて一箇の時く敬されて他
事を営まに彼是書きまるる巧を加
し世りを送り樹懷を慰する者多くは
織物を拵ふを以て常とし又其酒甚
つきて名く果来を以て醸造を支那のりい
大よ清味なり勝まり酒の高価ビール等を以て製造
食を倒ふるも支那人る越ふ其代所

生の芳草を用て其を和を其紙楮皮を
以て製造支那人の竹まを以て
する所のものゝ如き堅勁なして毛白し
欧羅巴人もて絹を以て紙を
製造するも支那も又たゝや人家飾物の漆器
を見るに其美なて實る驚に堪へり
支那人東京人の用心勤励を其もの求
ものて其際を倒製しかゝひこと塗ら
の巧妙通敏なるを以て紙をしかの選

羅人のめきき西中に樺樹充満せ
ども大に懶惰怠慢をもたして樺に於
て求め望むおのゝ實に又多角きは
日本百工の精巧の器械産物全く
人を以ての為なるもまさに唯奢侈華
美の用のみ其國の強弱に生て其京
国の富たる價一万に昇て分
地法州の通商の大なるて言語も異
雖ども嗚呼全く亦生の商賈の有るの
ら熱帯のもん如の半の勤力すもん其庫
小如の有るの船舶の充満せもん而
富饒交易の城下如の有るの有るん
諸海の演法港の辺人民衆多して繁
多の帆を揚げ宿き大小法船の繁多
なる或ハ亦稽古為ハ或ハ閑遊人為
れハ國中の人共く海辺に居住して

陸路の方ハ全く廢して空虛なるかと疑ふ
小憩する但し其船の製を見るに其狀
なる所あり形狀の異なるあるの中に支法
の數なるにようも上面淵きたるのそれ
皆船上を密く閉て穴あり
て底より通じて其穴あり蓋しかり弗廿一の図を見よ
是いにかけ南を遠離せしめさん爲也
如何とするに教て適る大洋より出んとせと
船は水のうしろ必ず没溺せざるべからず

實に於て進て日本人の学術那麼のかを
策するを恐くは知者なるべしと雖ども
日本人元よりかの大なる学術を思て是を解
せ能者なる國より追放せる彼の輩なり
何ぞ也 誓言するに何の為
なるやを考 唯これを玩
娯の具とし勢を飛の隱遁服するして代の
営すべきものこれを以て其辯惰を解
に至るとて能て以て此を(ことを)矣くい窮理

科の上ハ[illegible]り徒り科のおきい大なる
[illegible]上夫より根拠もなくして些少の要旨の
智士孔子の恩沢[illegible]孔子い我邦
羅巴人の而謂コンピュテース是なりソコラテス
古人の名 ハ孔子に倍する百年を[illegible]り其性厄勒
祭典用因りて百年を[illegible]
厄勒祭典人思ひらく是人
初めて直に上夫の啓発を[illegible]て道を人倫
より弘通せりと孔子の学大既かのソコラテス

の学とを同し独り日本人音樂のみに
在て全く不絶[illegible]り些いこと音声符合の
格を基[illegible]の術[illegible]検夫れ我國の雅樂[illegible]
[illegible]り又審定の学 義僕[illegible]原文ウイスキュンテと云り
術の数皆審定の新[illegible]理に属[illegible]夫学[illegible]理音律[illegible]
[illegible]学い他学い是非一決せざる[illegible]
[illegible]れ[illegible]る審定[illegible]名たくを和
[illegible]別[illegible]他[illegible]の術[illegible]
他信いまゝ[illegible]学を倣して探宗進
進[illegible]数審定[illegible]の光輝[illegible]

倫理明を以て其智を莊嚴するを好
むを我改羅巴人なるを者に所以也
天を知り天を信ずるを術なり惜哉
の即ち仏教なるを又を人倫を制を
示して禁ずるを祖先の教法を棄て
かの所謂天主化して人となり衆生救
の為に磔死の辱を請ふるを新に
して教法を建て教を今日に至る

そなり小乗吉利支丹の教法この東極の
地にありて金盛なりしが程なく滅び
是の為に弱死せしの教を知る人是即か
のさも勇猛勇猛なりし法師等の恩
より起きたりる我男子なる若しかの邪
蕃民等の其基本のいまく国外に教を
とせた自己の用心類模の大過やうに仕セ
にして新たりせん殆ど吉利支丹の信心

弘通して御ようかを本國より其勞
の報賞をもはるかに至て終よりく
自得する所あるべきや其手の事を求るの
急なるを堪へて風俗変化の成功の速な
らざるを嘆じ毎に他事を雖へく
其為る所来たりあらるべきの極意なり此
すべき天地無隔の異なるを思へ勉々
数程を修する微々成しなるべし所あり也

凡そ人の心を以て其福を招き祈しく
大なる其徳計なれ本意を失ひ代背像家
今の仏法の教
とたるなるべきを以て家を治る故に害あり
又八異教の法著を容るるも悪さる
ものなり本より日本人を世仏教の徒
とは思ふべき其國件多の教法あり
て大なる其神仏を号して是に奉事する

仏法も一旦発願して我決定して人日々人
の善を勉め行を際くしかるに佛神小
事にも我儀の暫行にも吉利支丹宗門の
存念無よりて魂魄安樂のために生
死を用ゐて大なり別てしく罪業を懺悔
し弥よ来業の福を形に豈まりく散悪
を小変ずるを伝へ又日本醫術の外科
ならハ内科より巧なり其外科又より殊羅
巴の流なれ共も用ゐ拙き醫者に治術
を施すを多端なるに外敗を決定
減とのこなり是二者切甚大なるに
病根を滞塞して名付て滞塞して痛を
なすなるを風と名く二者より病根既
追ひ出し風なれ共も宰相を脱出し
為きの通路を得むとなり指の動く
日々の湯治を純粋事神の一道と昌

天性の清潔を好むが故に大いに
心身を益して以て壮健を保
ちて土人の死亡多く雖も疫病
を除くこと功力大なり日浴の外又其地
善良なる温泉あり緩慢の疾憂然の症
なる病人を、些紙を考へ其効験に
功れり

コンヒユースのなる和蘭人の書るも
のを見るに小豊臣侯をビユゴと書き
薩摩をサラユマと出れ数多られ
い實はコンフツースなる者又古人乃
名にソコラテスまたはトイスまたは
プリンユースなる多く来るなり
を活るなり紙を活コンフツースなる
夫子は華音コンフウロウの化なん
往年我國の人を迷せ耶蘇の

なれば更に洋学本論の末に見ゆゾ
コララスの教を羅嬪大王の羅嬪
ラリコンスタンチノペル小亞都あり利
法命比もりて、用ゆるもてり王を
是道を以て宗とも惜もれ給ふ吉
利支丹の徒の進あにらして是邪
なく是を遮ものいう強き
世を行きてもて七百余年の間へ

実に取りて又論をきてのう遠く
或は云て何ん日本人刑法誌断
のことを熟知せ法ゆ法を我を
以観ま、我歌羅巴人もまた不能ずて
彼を同しみ何てなく強き有用の術る
ものの伐其西あふりて尚教の邪教
みて却て全を加らて屋となり

化某のことなりし東方に法ありて裁斷
を為す捷經あり彼地より来たる裁斷
角法多年なりて我が法を陵書答出
ずるの催促の勢なきを頼とす（毒の出告官
更より出す催促を官吏より裁斷の速なるを信ずるを以て）
直に毒を
廳所より改しても黨の言少れ法規を
化明せざるを毒曲を非較せざるに付
四て決斷小なる独もあり
廳より呼ぶ時暑なり少なりとして彼
地より来たる小廳なりとしても其既に儀式
出言せず而して大廳に至を改めて能き
ものか故なり斯のごとき裁斷の簡法格外
のものに当たる過失あるを免れ
いて否と云ひ難ずる度なれども我邦
故ていえん大緊是学者の法これを改革
巴の裁斷遅緩ずして費用多くして大小

困憊を以て小比されい其積をうしなふ故
黨を生て行も小なるか故に巴のあるは
輙す也い事件厩所より為帰すの限も
知る也に勢作のなき延引の重なる
故出件屢なる其他百爾の奸智を用
ゐて人誰か知らん（此の奸黨の不為を以て我も是の事を避後るい亦其積を受く）
官の不為なる奸黨
去るを為りしい又大廳の為より遠ても引

去るの外更に何の妨事なよ為り
て再び其をと反復し黨影皆新
礼明せるを難保のるを憂慮のなる
なるひ徒費隨て増長を是所謂為を
避て却て険難に陥る新なるを　拙
といても日本人より生て全く刑法の
とい思つるに其國刑法制令除小
勝を以て是を守る事緊要小

て達するもの小犯といへども拷問を加へ
小事刑を設くるもの如何ぞやとなく
るゆゑ達窓庶の地をして斯のごとく
繁栄の體を維持せしめて かの豪傲剛
烈なる民其性又変化常なること 其辺海
の風景屬ふして不穏なる事なきゆゑ
なり蜂起逆逆の心を見ることなく
我邦人右の刑法のなるひ弱なる故

来の多福なるもの何ぞ今我讀者我
して日本人何ぞ都なる強國の後を決
定し又如何なる弱なるものを成就
せるやいなるを知しめんがため著す点
の左の所紀の中に於て明白なるべし

歌羅巴なる比レストキユニデ 此を和蘭 偽なり
なる刑法の学問有り 此方小く
いさるなるなきゆゑ歌羅巴の目

より見て刑法より疎く又刑法なしと思うんてなりひて検事示
太の如く言うものなり改正刑法
の事は彼方まて明白なること
なり故太の一段より於て正言稽
異せり事はまた他書より考へて注

八十一 川